



村瀬俊雄さん長女琴子さん（柿名人）



蜂屋柿の保存木



村瀬俊雄さん（右）



後藤史威(左)、酒向宏輔（右）

▽村瀬俊雄さんの経歴

1992		1978			1935	1930			1910	年代	
平成 4		昭和 53			昭和 10	昭和 5			明治 43	年号	
使命をはたされる（82歳）	蜂屋柿は見事復活し、再び美濃加茂市の特産品になる	俊雄さんを中心に蜂屋柿振興会が発足（68歳）	困難を極めた	柿の栽培、乾燥の仕方など、高度な技術を必要とした蜂屋柿の復活は	戦地から手紙で「肥料や消毒のこと」を家族に伝える	長女琴子さん誕生	俊雄さんが再び蜂屋柿作りを始める（20歳）	昭和初期、蜂屋柿の需要が減少。養蚕が盛んになり、蜂屋柿を作る農家がなくなる	大正10年ころは、約30戸の農家が蜂屋柿を生産	蜂屋村中蜂屋引田に生まれる	年譜

人生のすべてを蜂屋柿にかけた村瀬俊雄物語

復活！「堂上蜂屋柿」

文・写真／後藤史威、酒向宏輔（^{ひみだか}蜂屋小学校 6年）

大正5年に坪内逍遙が作詞し、今も歌い継がれている蜂屋小学校の校歌にも、かつて朝廷に献上された「堂上蜂屋柿」のことがでてきます。

また、歴代の将軍を魅了しつづけた蜂屋柿は、明治時代に世界各国の博覧会でも高い評価を得ました。できたばかりの校歌を歌っていた小学生の中に、その人はいました。

昭和の初め、養蚕業におされて蜂屋柿を作る農家はほとんど無くなりました。20歳の青年農業家となった村瀬俊雄さんは、そのとき堂上蜂屋柿の再興を決意し一人立ちあがりしました。

しかし、蜂屋柿の原木すら特定できない状況で、干し柿の製法も伝えられてはいませんでした。村内を探し歩き、ある家の庭先で原木を見つけ、その木の枝を買って接木して、やっと栽培に成功しました。

復活を期して立ち上がった次の年に、満州事変がぼつ発して、以後日本は泥沼の戦争に突入していきました。村瀬さんは結婚して、琴子さんも誕生しますが、やがて戦地に出征することになりました。しかし、戦地からの手紙の中で蜂屋柿のことを心配して、肥やしや消毒の時期など細かいことまで指示されていました。

商品の販売では、終戦後の食糧難が続くときも、一人蜂屋柿をリュックに詰めて、岐阜市や名古屋方面の企業や菓子屋・百貨店に一軒一軒行商に歩きました。温厚で誠実な村瀬さんが丹精込めて作った蜂屋柿は、次第にその販売ルートを拡大していきました。

しかし、このままでは自分の代に蜂屋柿の生産は絶えてしまうと危ぐし、何度も町民に蜂屋柿の復活を呼びかけて、念願の蜂屋柿振興会を立ち上げ、堂上蜂屋柿を美濃加茂市の特産品に育て、見事に復活させたのです。